

作品 No.080



生きものの“つぶやき”：

「埋めつくせ」

エッセイ：

梅雨も終わろうかという七月末、京都のとある溪流にやってきた。特に決まった目当てもなく被写体を探すうちに、原型を失った倒木に群生する「彼ら」の姿が見えた。数メートル離れていても、しっかりと本種だとわかるほどに一面を覆いつくしている。その姿とみなぎる生命力に、思わず圧倒される。息をのみつつも、近づいて眺めみる。すると、個々はなんとも儚げで繊細な姿をしており、二度驚かされる。透き通るような柄、きらめく傘に、ほのか

なワインレッドのヒダ。夢中になってシャッターを切り続けた。(234 字)

生きものの紹介：

イヌセンボンタケ *Coprinellus disseminatus*。様々な樹種の倒木などに発生する腐生菌。しばしば大規模な群生を作り、和名はこのことに由来するとみられる。

撮影場所・日時：

京都市・2020 年 7 月 25 日

応募者の自己紹介：

1. 前田 創／大阪府立茨木高校 2 年
2. 所属：ライフル射撃部、クイズ研究サークル所属
3. 将来の夢：菌類の研究者になりたいと思っている。

審査委員会からのコメント

作者の菌類への愛は半端ないですね。生きものは芸術だと思わせる世界観があります。生命力を感じる一枚。

作品 No.081



生きものの“つぶやき”:

**「菌(くさびら)と 永久の我が居と 定めたり 衣擦れたる さすらい
の果て」**

エッセイ:

残暑も厳しい 9 月初め、暑さを避けに来た京都の溪流。そこで見つけたのがこのガヤドリナガミノツブタケ。おそらく未熟であろうか、まだ子嚢殻はできていない。しかし、既に子実体をニョキニョキと宿主から伸ばしている。宿主のガの翅は擦り切れ、穴も開いているが、突き出たキノコの子実体はしつとりと若々しい。そんな風に考えていると、生きているときはせわしなく飛び回り傷んだガの体が、ガヤドリナガミノツブタケの菌糸によって固着し、ようやく安住の地を得たようにも感じられる。ガからキノコへ、やはり冬虫夏草という生き物は、私たちに生命のつながりを自然と感じさせてくれる。

本種のような空中に発生する冬虫夏草は、この溪流沿いのような特に空中湿度が高く、宿主の多様性に富んだ自然豊かな環境にしか発生しない。しかし、存在すらあまり知られていない彼らであるから、誰も気づかないうちに環境の変化によって消えていってしまうだろう。それは何とも寂しいことなのではないかなあ、と思う。(421 字)

生きものの紹介：

ガヤドリナガミノツブタケ *Akanthomyces tuberculatus* の未熟個体か。

ガヤドリナガミノツブタケ(蛾宿長実粒茸)は、ヨトウガなどの鱗翅類の成虫に寄生し、子実体を発生させる冬虫夏草の一種である。

撮影場所・日時：

京都市・2020年9月6日

応募者の自己紹介：

1. 前田 創／大阪府立茨木高校2年
2. 所属：ライフル射撃部、クイズ研究サークル所属
3. 将来の夢：菌類の研究者になりたいと思っている。

審査委員会からのコメント

冬虫夏草を見つける観察目に脱帽。写真も素晴らしい。